

【コメント】

高橋美樹 TAKAHASHI Miki

私は討論レジュメを1枚用意してきました。裏に歌詞が書かれていますので曲をかけたときにご参照ください。私は、コメントと言うよりは、今回の議論の全体討議の中の素材となる三つのことを、沖縄とハワイの音楽にかかわる歴史的現象について呈示したいと思います。

一つ目は沖縄移民の象徴としてのハワイということです。昭和初期の日本の状況としては、とても慢性的な不況に陥りました。そういう経済状況から抜け出す道を模索し、自らの生活、家族への送金を目的として、沖縄でも日本本土に出稼ぎ、海外移民へと旅立つ人々が急増していきました。1927年に沖縄出身の普久原朝喜が、出稼ぎ先の大阪で沖縄音楽専門のレコード会社「マルフク・レコード」を設立します。沖縄民謡や琉球古典音楽のほかに、普久原朝喜自らが創作した「新民謡」を次々にレコーディングしていきます。その中に沖縄移民をテーマにした作品がいくつかあります。その中の1曲「ハワイ節」を紹介したいと思います。それでは、旅立つ別れの場面を歌いました「ハワイ節（1935）」をお聴きください。

(music)

歌詞の状況設定としましては、出て行く男性と見送る女性という構図があります。7番の歌詞に注目していただきたいのですが、別れの場であります那覇港は琉球国時代から現代に至るまで、海外や日本航路の船舶が出航する重要な港です。この「ハワイ節」でも、現実に即して那覇港での別れの場面が歌い込まれています。朝喜自身、沖縄から大阪へ出稼ぎに行くという移動体験を踏まえまして、沖縄移民をテーマにしたこの「ハワイ節」を創作したと考えられます。しかし、歌詞の中に「ハワイ」という地名は一度も登場しません。歌詞から出稼ぎ先や移民渡航先を特定することはなかなか難しいのです。その後、沖縄移民はブラジルや南洋群島、アメリカ合衆国と渡航先が拡大する中で、なぜ「ハワイ節」なのかという疑問が浮かびます。

その理由として、日本の明治政府がハワイ王国と1884年に移民条約を締結しています。日本の初期移民の渡航先というのは、砂糖プランテーションでの労働力を必要としたハワイであったということが挙げられます。沖縄からの海外移民はその15年後の1899年にハワイへ送り出されました26名が最

初です。こういうことなどから、朝喜は沖縄からの海外移民の象徴としてハワイを曲名に用いたと推測します。ちなみに、1940年にはハワイに1万4千人の沖縄移民がいました。

こういうふうには沖縄県の経済的な困窮状況から脱却する手段としまして、人々の移動による家族の離別とか、そういうことを歌った歌が「ハワイ節」と言えます。ちなみに、マルフク・レコードで制作されたレコードは、1928年以降ハワイにも輸出し始めました。戦前は、海外移民における沖縄民謡レコードの需要が非常に高かったということをつけ加えておきます。

二つ目ですが、半植民の島としての沖縄・ハワイという点です。ネーネーズのプロデューサーであります知名定男は、12歳で沖縄民謡の歌手としてデビューして以来、沖縄民謡界を中心に活動してきた人物です。1972年に沖縄が本土復帰を果たしますが、沖縄にマスメディアから注目が集まる中、1978年にはポップス歌手として知名定男は全国デビューします。シンガーソングライターとしての知名の作品が結集したアルバムは、沖縄人としての民族的アイデンティティを前面には出ずに、当時のニューミュージックというジャンルのサウンドに潜ませるかたちで表現様式を打ち出したということです。

まず1点目、レコードジャケットですけれども、キャニオンレコードから発売したLP『赤花』EP『バイバイ沖縄』のジャケットを見ていただきたいと思います。このレコードのジャケットですけれども、宣伝広告に使われたのは真っ赤なハイビスカス（赤花）——沖縄では赤花と言いますが——の絵でした。背景には、こういうふうには青い空とエメラルドグリーン的大海、それから白い雲を思わせる淡い色彩が塗られています。こういうふうにはレコードジャケットにおいては沖縄色が前面に表れております。レコード会社が考えた知名定男の宣伝キャッチフレーズは「南国の温かい心、そしてサウンド」という言葉と同様の傾向がこのジャケットの絵からもうかがえます。

2点目ですけれども、マスメディアの言説を少し見たいと思います。この知名定男を取り上げた記事の一つ目の特徴は、「常夏の南の島イメージ」のタイアップ。レジュメにも載せました。記事をちょっと読みます。「沖縄ではハイビスカスのことを赤花という。赤花は強烈な太陽とどこまでも青く透明な海の島によく似合う。今、その赤花の生命に惹かれた男—知名定男」ということを言っています。そして、この記事ではありませんが、もう一つ「日本唯一のトロピカルシンガー、知名定男」という見出しの雑誌記事もありました。先ほど、「バイバイ沖縄」のジャケットを見てもらいましたが、あれに描かれたハイビスカスの南の島イメージが端的にこういう記事にも盛り込まれていることが分かります。南の島イメージとシンガーソングライタ

ーを組み合わせた「トロピカルシンガー」という用語も生み出されています。

二つ目の特徴というのは、沖縄イコール「アイランド・ミュージック」の歌手として知名定男を紹介する記事が多いことです。知名より1年前の、1977年に全国デビューした喜納昌吉きな しょうきちの音楽というのは、当時音楽シーンで注目を集めていましたジャマイカのレゲエと比較して、双方の音楽のあり方や風土的な共通性を導き出しながら批評する傾向が強くありました。そして、それらの議論というのは「アイランド・ミュージック」というくくりの中で、沖縄の音楽や喜納昌吉の音楽を紹介していました。知名定男が全国デビューしたときの記事も少し見てみたいと思います。「今、明らかにパワーダウンしつつある世界のロック・ポップスシーンにおいて、唯一注目を集めているのがジャマイカのレゲエ、プエルトリコのサルサ、ハワイのサーフロックなど、アイランド・ミュージックと呼ばれる半植民の音楽だ」ということです。今、皆さんに見てもらっている記事ですけれども、この記事の中では、喜納昌吉と知名定男と海勢頭豊うみせ とうたかという3名が日本のアイランド・ミュージックの歌手として紹介されています。1970年代後期には、「常夏の南の島」と「半植民の島」と共通のイメージを、沖縄やハワイのポップミュージックに委ねていたことが分かります。

最後に、三つ目の1970年代の沖縄を描いた「グッドナイト・マイ・ハニー」という曲を紹介したいと思います。先ほど、ロバーソンさんが取り上げた作品の一つに、ネーネズの歌「情け知らずや」という曲がありました。この曲は、岡本おさみが作詞しまして、ネーネズのプロデューサーである知名定男が作曲しています。喜納昌吉や海勢頭豊などシンガーソングライターが自ら作った歌を歌う状況とは異なりまして、プロの作詞家・作曲家がある歌手に提供した歌、つまり日本の歌謡曲のシステムと同様の共同作業によって生み出されたのがネーネズの「情け知らずや」という曲なのです。岡本おさみというのは、森進一がレコード大賞をもらいました「襟裳岬」吉田拓郎の「旅の宿」こういう曲を書いた作詞家としても有名です。1978年に知名定男が全国デビューしたときに、シングルレコードの作詞を2曲担当しています。それ以来の付き合いが、1990年代のネーネズの作品も手掛けるようになったという経緯があります。では、1978年に知名定男が出しましたシングル「グッドナイト・マイ・ハニー」を聴いてください。

(music)

この曲は、米軍占領下の1970年代のコザ市、現在の沖縄市で、米軍人 (GI) の愛人となった沖縄の女性を通称「ハニー」と呼んでいたのですけれども、このハニーを題材とした作品です。知名定男がある記事の中で、『「グッドナイト・マイ・ハニー」』というのは、本当は『グッドバイ・マイ・ハニー』だ

ったのです。ベトナム戦争が終わって、兵隊たちがどんどん本国へ帰っていくという米軍放送のニュースが流れる。『グッドバイ・マイ・ハニー』みたいな雰囲気さがすごくあったわけ」と話していますように、法的に結婚が許されずに、子どもができて、その後男性はアメリカ本国に戻って、女性と子どものみが沖縄に残されるという悲痛な現実が描かれています。岡本は知名が話す沖縄のこのようなエピソードからヒントを得て歌詞を書き上げました。始めは貧しい生活から抜け出してお金を稼ぐためにハニーになった女性も、しだいに男性軍人に対して愛情を抱くようになるという男女の現実を作品化しました。当時の岡本おさみは、歌詞を書くために沖縄に滞在していたのですけれども、うまく作詞できずに、琉球方言（ウチナーグチ）の理解度が低い自分に沖縄の歌を書く資格があるだろうかと自問自答したとも語っています。岡本と知名のコンビ作品は、1990年代に入りまして「黄金の花」「真夜のドライバー」というふうにネーネーズに提供するかたちで復活します。特に「黄金の花」は初代ネーネーズの代表作になっています。

このように文化の政治性をテーマに作品を分析する際にも、作詞家個人の活動歴や歴史的な流れの中でこういうふうな作品を位置付けて、作品が生まれた背景も探ることが必要ではないかと思いました。もう1点は、シンガーソングライター——喜納昌吉や佐度山豊を取り上げられましたけれども——の作品と今回の「情け知らずや」のネーネーズというのは、歌謡曲のシステムで生まれた作品を同列に扱うことへの配慮ということが少し必要ではないかと、ロバーソンさんの事前の原稿を読んで思いました。